

竹内正一が描いたハルビンの 都市表象

——「ギルマン・アパート点描」「馬家溝」を中心に

呉佩軍

✉ wupeijun@m.scnu.edu.cn

After the founding of Manchukuo in 1932, Japanese colonialists took control of Harbin, an international city in Northeast China, and used it as a “foothold for north-aggression.” In this context, the structure of power and capital in Harbin changed, and the division of urban space and society was further intensified. Japanese writer Takeuchi Masakazu created a series of works such as “Guillemin apartment sketch” and “Majiagou,” describing the changes of the urban representation of Harbin. These works also touched the ethnic and class antagonism and the discrimination against women hidden behind the changes.

Keywords Harbin(ハルビン), Urban representation(都市表象), Colonialism(植民主義), Antagonism(対立), Disruption(分裂)

1 はじめに

ハルビンには1898年、中東鉄道の要衝および帝政ロシアの「満洲支配の拠点」、「南下の基地」として歴史の舞台に登場した。20世紀に入ってからは一躍、極東一の商業都市と金融中心地となった。旺盛な商業と貿易活動によって巨額の富が築かれていた。そのために、世界各地から、富を求めた人が殺到した。20世紀前半期は、日本を含めた33カ国から十数万人の移民がハルビンにやって来て、16カ国の政府がここに領事館を設置した。ハルビン史上最初の日本人移民は、ハルビン医務局長プレチコフの女中として、1898年にやってきた宮本千代である¹。その後、日本人の商人、労働者、風俗業者、旅行者が続々と訪れてきた。このようにして、道裡区の石頭道街と地段街を中心とする日本人街が誕生した。1901年、日本人居留民会「松花会」が成立し、1907年、日本ハルビン領事館が設置された。1913年には、ハルビンに進出した日本企業が20社にも達した²。日本人居留民は1901年の280人から1917年の2,288人に増えた。1917年、帝政ロシアの崩壊とともに、ハルビンにおけるロシアの勢力が衰えていった。翌年、日本軍はシベリアに出兵すると同時に、中東鉄道の占領活動に参加した。この背景と相まって、ハルビンにおける日本人の勢力が強くなった。「満洲国」成立後、日本植民主義政権はハルビンを「北進の拠点」と「対ソ防衛の基地」と位置づけ、国内から移民を積極的に誘致していた。日本人居留民の人数は1932年の5,051人から1933年には9,096人に急増した³。1935年、ソ連が日本植民主義者の圧迫を受けて、中東鉄道および関連施設の所有権を譲渡して、ハルビンから国内に引き揚げた。その後、日本植民主義政権はハルビンに対する徹底的な支配を確立した。日本人居留民の人数は1935年5月の18,130人から同年11月の27,171人⁴、さらに1943年の86,000人までに急増した⁵。

このような背景の下で、数多くの日本文学者がハルビンを訪れて、都市表象を題材にした作品を創作した。これらの作品は大まかに四種類に分けられる。一つ目は、都市の風景を描いた作品である。1899年4月、小越平隆がハルビンを訪れて、『白山黒水録』（別称『満洲旅行記』）において、都市建設の状況を記録した。1902年、二葉亭四迷が「大陸雄飛」の夢を持って、この町にやってきた。その後、夏目漱石、与謝野晶子夫婦などが「満鉄」の招待でハルビンを訪れて、随筆と紀行文を書き残した。二つ目は、ロシア人の風俗産業に従事する女性を描いた作品である。奥野他見男の『支那街の一夜』（潮文閣、1923年）と『ハルビン夜話』（玉井清文堂、1929年）、佐倉啄二の『艶色極東地帯』（白鳳社、1931年）、群司次郎正の『ハルピン女』（雄文閣、1932年）などはその代表作だが、そこではハルビンを「裸体踊りとキャバレーの歓楽郷」や「性欲の都」⁶と描き、亡命ロシア人女性

1 佐藤四郎『北満草創(邦人発展史)』(哈爾濱日日新聞社、1931)、p.22.

2 薛連挙『哈爾濱人口変遷』(黒龍江人民出版社、1998)、p.150.

3 広岡光治『最新哈爾濱案内』(大北新報社、1934)、pp.226-228.

4 哈爾濱特別市公署総務処庶務科『哈爾濱』(哈爾濱特別市公署、1936)、p.18.

5 注2に同じ、p.156.

に対して日本人男性が抱く欲望を映した。三つ目はハルビンを舞台にした歴史劇の脚本と探偵小説である。長谷川海太郎(谷譲治)の「安重根」(『中央公論』1931年4月)・夢野久作の「氷の涯」(『新青年』1933年2月)などである。四つ目は、「ハルビン」に定住した竹内正一などによって創作された小説である。

竹内正一(1902-1974)は「北満」文壇の旗手・「満鉄」植民地文化事業の指導者・文芸雑誌の運営者の身分を兼ねて、文学創作・図書館の管理・雑誌編集などの活動を行っていた。彼は1902年、植民者二世として大連市に生まれ、小学校卒業後、東京に戻り、私立順天中学校を経て、早稲田大学仏文科に入った。1926年、大学卒業後、大連に戻り、満鉄大連図書館に勤務した。その間、文芸雑誌『作文』の創刊に携わり、文学創作活動を始め、「満洲文壇」に登場した。1934年1月には満鉄ハルビン図書館に異動した。翌年3月の「北鉄接収」とともに、中東鉄道中央図書館が満鉄に引き継がれ、満鉄ハルビン図書館と合併された。1937年、竹内正一はこの新しいハルビン図書館の主事(実際の館長)になり、「満洲国」の図書館の運営に力を注いだ。1939年5月に編集長として文芸総合雑誌『北窓』を創刊した。また、「満洲文芸家協会」と「ハルビン日本文学協会」の主力メンバーとして活躍して、「満洲文壇」の発展を推し進めていた。1944年11月に南京で開かれた第三回「大東亜文学者大会」に「満洲国」の代表として参加した。1945年5月、満洲出版文化研究所の理事に転職した。戦後、東京赤十字病院図書館館長を長年勤めた。滞満時代の竹内正一は、数十の小説・随筆・評論を発表し、『氷花』・『復活祭』・『向日葵』・『明日の山河』という四つの作品集を出版した。滞満時代の創作は1941年を境にして前期と後期に分けられる。1934年から1941年までは、ハルビンの都市表象をテーマにした現実主義文学の創作である。1941年から1945年まで、やむを得ず、国策文学の創作に身を投じた。

竹内正一のハルビンを題材とした小説が発表されてから、すぐ「満洲国」文壇に注目された。日系の文学評論家と作家は、これらの作品が「日満露」の三つの民族の内心世界を描写しているが、社会問題に触れずに、思想性に欠けていると指摘した⁷。戦後の学界では、竹内正一の故郷意識および現実主義的作風の考察に集中している⁸。竹内文学に

6 奥野他見男『ハルビン夜話・支那町の一夜』復刻版(東京：ゆまに書房、2007)、p.1.

7 西村真一郎は「竹内正一論——氷花を中心として——」(『満洲浪漫』第3輯、満洲文祥堂、1939.7)において、「この九篇の小説に不満を感じるものありとすれば、竹内氏の社会や民族に対する思索に、いささかの批判性をも見出し得ない点にある。(中略)思想の欠如と社会批判の皆無に就ての不満を、美しい温かい人間性が救ったのである」と評した。山田清三郎は竹内正一『復活祭』(満鉄社員会、1942.5)の「序」において「竹内正一氏の作品を読むと、私はいつも、一種しみじみとした情緒の世界に引き込まれる」と指摘した。浅見淵も『復活祭』に寄せた「序」の中で「竹内正一の作家としての冷静な傍観者の態度は、じつに人間としての無力感から胚胎しているのだ」、「竹内正一が十九世紀的諦観を潜めた詩人的作家に始終しているところに、同時に現代の作家としての若干の不満が感じられる」と論じた。

8 竹内文学については、根岸一成氏と岡田英樹氏の研究が最も代表的である。根岸一成氏は「竹内正一論」(杉野要吉編『昭和』文学史における「満洲」の問題』第3巻、早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、1996)において、「植民地二世」として大連に生まれた竹内正一が、白系ロシア人に対する描写を通じて、故郷と異郷の亀裂をモチーフにして、さらに省三のような日本人の描写を通して、暮らす土地に定着しようと呼びかけたと評した。岡田英樹氏は「竹内正一論」(『立命館文学』第573号、2002.2)において、竹内正一が作品の中に政治からの影響をよそにして、自由主義の大連イデオロギーを貫こうとして、零落れた白系ロシア人の持つ故郷の喪失感・貧しい日本人と中国人の逞しい生き方を客観的に描いたと論じた。他に、尾崎秀樹は『旧

ついでの研究が進められたが、なお不明な点がある。竹内正一は「日満露」の民族の内心世界を描いただけではなく、資本権力の交代および都市空間の分裂にも触れた。この資本権力の交代と都市空間の分裂は、市民の階層構成とともに、都市表象の一部に属している。竹内正一は、都市表象が変化した背景の下で、どのように「日満露」の三つの民族の内心世界を描いたのか、また、どのように民族関係を映したのか。これらの問題点がまだ明らかにならない。従って、本稿においては、「ギルマン・アパート点描」と「馬家溝」を対象にして、竹内文学が描いたハルビンの都市表象と民族関係を考察した上で、作者の創作意図を把握しようと試みる。

2 資本権力の交代の場としてのハルビンの表象

1935年3月23日、日本植民主義政権は、ソ連から中東鉄道および付属施設を1.7億円で買収し、さらにソ連の勢力をハルビンおよび「北満」から駆逐した。この事件は「北鉄接収」または「北鉄譲渡」とも呼ばれている。「北鉄接収」前後に大連から北上した満鉄社員竹内正一は、これを背景にして、ロシア人と日本人の運命の変化に焦点を絞って、短編小説「ギルマン・アパート点描」など一連の作品を創作した。

「ギルマン・アパート点描」は『作文』30輯(1938年3月)に発表された後、作品集『氷花』(作文発行所、1939年12月)と『復活祭』(満鉄社員会、1942年5月)に収録された。北満鉄道(中東鉄道)の接収でロシア人が次々と去っていく中、アパートは経営がますます困難になり、ついに日本人に買い取られてしまった。作者は、舞台の設定、情景及び登場人物の描写に力を入れて、資本権力の交代に伴った日ロ両民族の運命の変化を語っている。

小説の舞台はハルビンのキタイスカヤ大通に面するギルマン・アパートと付属レストランである。キタイスカヤ大通は即ち今日の中央大街である。ここはハルビンの地理的中心地でもあり、経済の中心地でもある。「ハルビン駅の北側で中東鉄道をまたぐ陸橋につながり、プリスタン(道裡)とノヴォゴロード(南崗)を結ぶ通りでもあった。そして、日露戦争後にはロシア資本の商店だけでなく欧米資本の商店や銀行も進出し、ハルビンの繁華街となった」⁹。『哈爾濱商工名録』(1939年)によると、全市の2720軒の商店の中には、道裡にあるのが1635軒(60.11%)、キタイスカヤ大通にあるのが134軒、何れも銀行や大手商社である¹⁰。例えば、秋林商社・モデルンホテル・松浦洋行・朝鮮銀行・ロシアの極東銀行などである。ギルマン・アパートとレストランの所有者はギリシア人で

植民地文学の研究(勁草書房、1971)においても、「『作文』派の作家・竹内正一が好んで描く人物——北満に次第と賤民化して行きつつあった白系露人の哀愁を帯びた生活にも、おとなの童話とでもいうにふさわしい浪漫的な肌理のこまかい作風をもつ『満洲浪曼』派の北村謙次郎の観照のなかにも、民族問題は出てこない」と論じた。

⁹ 西澤泰彦『図説「満洲」都市物語』(東京：河出書房新社、2006)、p.25。

¹⁰ 哈爾濱商工会『哈爾濱商工名録』(1939)、p.2。

あるが、レストランに来るお客さん、アパートの住人と女中の殆どが白系ロシア人である。しかも、アパートもロシアの銀行の資金援助を得ていた。ここから見れば、キタイスカヤ大通はハルビンの象徴で、ギルマンアパートはロシア資本とロシア社会の象徴である。経営不振に落ちたアパートが日本人に買収されたのは、ハルビンの経済主導権が日本によってコントロールされたのを象徴していると言えよう。作者はマクロの世界の資本の変遷をアパートに投影して、権力交代の過程を細かく描き出した。

政治権力と権力資本は絡み合って、お互いに影響を与える存在である。両者は共に都市の性格・表象・市民階層の構成などを規定する。政治権力の交代は資本権力の変化をもたらすが、資本権力の変化は政治権力の交代より遅れていて、しかも複雑である。植民都市においては、資本権力は政治権力からの支持を得てはじめて市場の主導権を握れる。1917年ロシア革命勃発後、ハルビンにおける帝政ロシアの政治権力が次第に衰え、市場に対する主導権も失った。1935年「北鉄接収」後、ロシアの資本は日本の資本によって市場から徹底的に追い出された。政治資本と権力資本の変動とともに、ロシア人と日本人の社会地位が逆転した。前者はハルビンの政治、経済を支配した民族から下層民へと、後者は外来者から支配民族へと身分を転じた。

「ギルマン・アパート点描」においては、作者は比喩・対照などの表現手法をもって、ギルマン・アパートと付属レストランの寂れかたをしみじみと描いた上で、ロシア人がこの植民都市において疎外化と他者化されたことも暗示した。小説の冒頭には、「レストラン・ギルマンでは、ホール全体を今晚の結婚披露の会場に貸切つて、その準備に朝からごつたかへしてゐた」、「自動車は何台も、何台も玄関の前に止つた。その度に、白いイヴニングを着た女と、タキシードの男とが腕を組んで入つて来た。みんな明るい顔をしてゐた。女は灯の下で取りわけ綺麗に見えた」¹¹と描かれた。お客さんの顔と服をクローズアップすることによって、レストランの賑やかな雰囲気や醸し出し、さらに、レストランの一時的な繁栄の様子を描いた。それに対して、結末には、「アパートの一室一室が歯の抜けるやうに空いてゆくと、同じやうに階下のレストランの淋れ方も、一日一日ひどくなつて行つた。晩もまだ十二時前といふのに表を閉めることが多かつた。冬の頃まで入つてゐたバンドも断り、二三人ゐた通ひダンサーも来なくなつた。そして、やがて、この店が居抜きのみで、売りに出たといふ噂が、アパートの露人達の間には伝はつた。買手は何でも日本人だといふことだつた」¹²。住人がアパートから引越したことを、歯が抜けると喩えた。その比喩によって、アパートの衰退を描き、ロシア人社会の崩壊を物語る。また、冒頭と結末の色彩の明るさと暗さ・気分の明快と憂鬱の対照によって、レストランの衰退ぶりを刻々と描きだした。

白系ロシア人の虚弱と日本人の強大のコントラストもなされた。小説に登場した白系ロシア人が最も多く、職業別に見ると、アパートのマネージャ、女中、レストラン

11 竹内正一「ギルマン・アパート点描」(『氷花』、大連：作文発行所、1938)、p.75.

12 注11に同じ、p.105.

のcock、ダンサー、売春婦、泥棒に分けられているが、何れも貧しい生活から抜け出せない下層民である。それに対して、作中の日本人はほとんど富裕層に属し、豊かな生活をしている者である。特に、アパートの白系ロシア人住人と日本人住人の生活境遇が対照的である。「白系露人達の大部分は今更引っ越すにも、金もなく、室代もみんな五十円百円と溜まって身動きのできない連中だつた。暫くその日の食費を稼ぐだけがせい一杯だった彼等は、追ひ出される迄は動かそうとしなかつた」¹³。それに反して、アパートに住む日本人夫婦は、主人が安定した仕事を持ち、毎月きちんと家賃を支払い、妻が優しくて貧しい女中を援助していた。日本人向けのアパートが出来た後、二人はぼろぼろになったギルマン・アパートを去っていった。他に、よくギルマン・アパートに住んだダンサーを訪ねてきた金持ちの日本人男性も描かれた。彼は、「いつも、自分で小型自動車を運転してやつて来た。その男の来ているときは、黄色く塗つたダツトサンが、横門の前に止つていたので直ぐ判つた」¹⁴。最後は、この日本人男性はギルマン・アパートを買収し、使用人に給料の残額を支払った。白系ロシア人と日本人の経済地位の差の背後には権力の差が見える。アパートの白系ロシア人住人たちはほとんどしっかりした仕事を持たないのに対して、日本人は会社の課長あるいは社長として高い収入を得られる。前者は権力を持たない被支配民族であるのに対して、後者は支配権を持つ民族である。

ロシア人と日本人の群像を描きながら、竹内は女中のマルーシャの生き様をスケッチした。「マルーシャは永い女中働きで荒れた皮膚にむりに白粉を塗つて、顔はしみが出たやうに、ところどころ剥げてある」¹⁵という不細工な女性である。きつい仕事をしていただけの低い給料を得た。アパートは経営が悪化して、女中の給料さえ支払えなくなった。家族のために、生きていくために、マルーシャはアパートの仕事をやめて、住人のオーリヤの紹介で、ついに売春婦に転落した。彼女はつよいプライドを持つので、キャバレーに勤めている、とみんなの前でうそをついた。その秘密がばれた後、マルーシャも消えていった。マルーシャは、ロシア文豪ドストエフスキーの『罪と罰』、及びフランスの文豪モーパッサンの『脂肪の塊』に出てくる売春婦の人間像とよく似ている。前者は兄弟を養うためにやむを得ず売春婦になった女性、後者は同行者のためにプロイセンの士官に身を売った売春婦である。何れも、生きていくために、身を売る女性の姿である。ここからみれば、フランス文学科出身、しかも図書館で長期的にロシア語文学資料を整理した竹内正一は、フランスとロシアの現実主義の手法から影響を受けたと言える。弱者としての女性を描くことによって、暗黒社会を深く風刺することができる。竹内は、マルーシャという売春婦に墮落した女性を白系ロシア人の縮図として、ロシア人女性が売春婦という醜い職業をしたことを隠喩として、嘗ての支配

¹³ 注11に同じ, p.83.

¹⁴ 注11に同じ, p.82.

¹⁵ 注11に同じ, p.76.

民族だったロシア人が社会の底に落ちたことをスケッチしたと言える。一方、白系ロシア人も弱体化して、他民族と対等になれない弱者になったことを強調する作者の意図も窺える。

竹内の他の作品においても、白系ロシア人と日本人の地位の変化が見られる。舞台をキタイスカヤ大通に置いた小説「流離」も、「露人の店は北鉄の譲渡以来、洪水のやうに入り込んでくる日本人の勢力に押されて没落の一途を辿るのであつた」¹⁶と明確に指摘した。「裸木」も資本権力の交代に伴う日本人とロシア人の人間関係の変化を描いた。キタイスカヤ大通付近の北満××所が中東鉄道の附属施設として日本人に引き取られた後、守衛のシガノフが急死した。その妹は所内の事務員の仕事をを得るために、日本人上司の手塚に卑屈な態度を取るようになったが、結局雇われなかった。「復活祭」(『新潮』1940年7月)の主人公のリウバも日本人の援助によって暮らすロシア人女性で、早くに夫を亡くし、日本人家庭の掃除婦として働き、夜は繻い物を引き受けて生計をたてている。

上述した小説は資本権力の交代の一側面を、芸術的な手法で描いた。しかし、現実世界における交代はより残酷である。1932年、「満洲国」成立後、ハルビン市の各政府機関と団体は、上層部だけではなく、職員のポストも日本人によって占められた。1935年、「中東鉄道」および付属施設が「満洲国」に「買収」された後、ソ連人の鉄道員と職員6,028人(及びその家族14,607人)が引き揚げた¹⁷。その空白は日本人によって埋められた。同時に、日本植民主義者は、金融・交通・商工業などの分野において、一連の政策と法律を定めて、日本資本の進出を支持した。このように、日本の資本が商業と軽工業だけではなく、造船などの重工業においても企業を設け、ロシア資本を追い出して、市場の主導権を握った。ハルビンにおいては、日本の商店は、1931年「九・一八事変」勃発直前の247軒から1936年の1,978軒まで、6年間で8倍急増した¹⁸。1939年8月、ハルビンの2,720軒の企業の内訳は、日本企業1,727軒・中国企業798軒・ロシア企業195軒であり、キタイスカヤ大通の134軒の商店の中には、日中ロの商店の比率が75:8:51で、日本の商店が総数の半分以上を占めていた¹⁹。1941年太平洋戦争勃発後、日本植民主義者は戦時体制を確立し、経済統制を実施した。それによって、ロシア人と中国人の企業は次々と倒産して、欧米人の企業も敵国産業として没収されることになった。

「ギルマン・アパート点描」などの小説は、資本と権力の交代期におけるハルビンの波乱万丈の世相を、一つのアパートを舞台にして、集中的に描いた。作中に登場した白系ロシア人と日本人は個人だけを代表するわけではなく、民族および国家の記号として、ハルビンの権力の交代と民族間の葛藤を物語っている。

16 竹内正一「流離」(『氷花』大連:作文発行所, 1938), p.48.

17 注2に同じ, p.160.

18 注2に同じ, p.18.

19 哈爾濱商工会『哈爾濱商工名録』(1939), p.2.

3 分裂したハルビンの表象

「馬家溝」は、中国人・日本人・ロシア人の生活空間を舞台にして、中国人女性の生活状態及び民族関係を描いた小説である。この小説は『新潮』1939年9月号に発表された後、中国語に訳されて、『芸文志』1940年第3輯に掲載され、さらに1942年5月に出版された作品集『復活祭』にも収録された。

小説の前半では、ハルビンの都市空間の分裂状態がしみじみと描かれた。建物は階級差別を示す象徴である。新城大街は高級商業区の道裡にあるメイン・ストリートで、銀行、デパート、レストラン、教会が立ち並び、町並みが美しく、「綢緞荘や五金行の飾窓は明るい電燈の光に緞子や銀細工物がきらきら光っていた」²⁰。しかし、馬家溝という河の畔にある中国人部落に行くと、別世界がある。「崩れかけた崖つづちに、風雨に赤く錆びたトタン屋根、羽目板の朽ちた板壁に、ひと押しすれば直ぐ倒れそうな高粱桿の垣に囲まれて、十二三軒、軒を並べ、雑然と一かたまりになつている」²¹。このスラムに住んだのはすべて貧民である。十三歳の娘を頭に八人の子供を家に残して働きに出ている女性、低い収入で辛うじて家族を養う大車の馬夫、ロシア人の苗木畑で働く女性、洪水で家が流された人、みんな辛い生活を送っている。また、貧民の子供たちは毎日泥水の中で素っ裸で飛び廻っていた。

晴れやかな道裡の新城大街は暗いスラムに辛うじて生きる被植民者と無縁である。主人公の王秋琴は近所の「廉のかみさん」に売春に連れられていった。道裡に入ったばかりの時、百貨店のショーウインドーに置かれた鮮やかな色の服に目を引かれたが、しばらくして「わけが分らないままに、何か心細い恐怖心がふと起こり」、「漠然とした不安に体が細かく震へるばかりで」、「黒い扉が堅く閉まる」と、「闇に包まれてしまった」²²。ここの「黒い扉」は王秋琴の「娼婦」へ転落する危機を告げるものと言える。もう少しでこの黒い世界に呑み込まれそうになった主人公は、必死に走り出して逃げ出した。この描写から見れば、道裡は天国のように見えるが、実際は貧民を飲み込む地獄である。

「馬家溝」は芸術作品であるが、ハルビンの分裂した生活空間の真実にも触れた。政治権力は資本権力と結びついて、市民を異なる階層に分け、都市空間を区切る。都市の空間構造は空間範囲における都市の諸要素の分布と組み合わせの状態を指すもので、経済構造、社会構造の投影である。植民都市の空間構造は植民主義者と被植民者の二つの活動の場に分けられた分裂した状態にある。ハルビンの都市空間も対立した二つの世界に分けられていた。一つはロシア人によって建設された近代的な市街で、もう一つは中国人が居住する前近代的な市街である。前者は南崗の高級住宅地・道裡の商業区・馬家溝の台地にある別荘地を指す。後者は中東鉄道附属地に隣接する傅家甸、馬家溝の低地の部

²⁰ 竹内正一「馬家溝」(『復活祭』満鉄社員会, 1942), p.13.

²¹ 注20に同じ, p.14.

²² 注20に同じ, p.12.

落を指す。鉄道付属地の外にあるので、道外とも呼ばれる²³。緑地が多く、建築が立派で、治安がよい道裡・南崗に反して、道外は道が舗装されず、上下水道などのインフラ施設も整備されない不潔な街で、しかも、遊郭と阿片窟が多く、治安も悪かった。1932年「満洲国」時代に入ると、「大ハルビン建設計画」の実施によって、二つのハルビンがようやく合併されたが、高級商業区とスラムの限界が依然として峻別され、植民主義者と被植民者、上層階級と貧民階級の対立と衝突も続いている。日本植民主義者はハルビンの支配者として、ロシア人にとって代わって、(南崗)と埠頭(プリスタン、道裡)などに進出しただけではなく、馬家溝より南の高台に新しい高級住宅地を建設していた。

都市は人間が生活する場であるため、都市の特性の中にも人間の属性が含まれている。都市空間の中には、権力が階級の構成と民族関係の様態を左右する。この意味から見れば、都市の分裂は生活空間だけではなく、民族と階級の関係においても現れている。「馬家溝」の主人公の王秋琴は被植民者の代表と言える。彼女は、Hという白系ロシア人が経営する苗木畑で、苗木の世話と温室の手入れをして、毎日70銭ばかりの国幣を稼いで、一家の生活を支えていた。しかし、妊娠し、体が重くて仕事を続けられなくなった。そのため、馬家溝の日本人高級住宅地へ行って、服を洗うバイトをして、一回10銭、1日70銭ぐらい稼いでいた。日本人の妻は体が重くなった王秋琴を思いやり、おむつ用の古い浴衣および1元の祝金を贈った。このように、王秋琴はロシア人と日本人から低い給料と物品を得て辛うじて生きている。苗木畑のロシア人主任及び日本人の妻は王秋琴に同情を寄せており、個人の関係においても、対立と衝突がない。しかしながら、階級の面においては、越えられられない壁がある。ロシア人は支配民族の地位から転落したが、経済の実力がある程度持っている。日本人は「満洲国」の指導民族として政治と経済の支配権を持っている。それに対して、中国人は政治権力と資本権力に鼻根されていない。作中のロシア人主任と日本人の妻は中流階層に属しているが、王秋琴は下層民である。王秋琴だけでなく、小説に登場した中国人の殆どは、下層民と設定された。

被植民者と植民主義者はどうも対等な関係を保つことができない。日本人の妻は、支配民族の一員として王秋琴に同情している。しかし、この同情には限界がある。日本人の妻は、王秋琴の苦しい生活だけではなく、彼女の名前さえ知ろうともしないようである。そして、名前の代わりに、「シーフ」(媳婦)という中国語で王秋琴を呼ぶ。日本人の妻は遅れてきた王秋琴を見て「どうしたの、今日は？ 莫迦に遅かつたぢやないか、シーフ」と言った。日本人の息子も王氏が院内の勝手口を開けて入って行くところを見て、「母ちゃん、シーフが来たよ」と怒鳴った。中国語においては、「シーフ」(媳婦)には息子の嫁、既婚者、夫婦間で夫が妻を呼ぶ語という三つの意味がある。息子の嫁及び既婚者を呼ぶとき、「シーフ」(媳婦)の前に夫の苗字或いは名前をつけることが普通である。それに対して、夫が妻を呼ぶ時だけ、「シーフ」(媳婦)の前に何もつけない。日本人

23 曲曉範『近代東北城市的歴史変遷』(長春：東北師範大学出版社，2001)，p.146.

の妻が「シーフ」(媳婦)と王秋琴を呼ぶのは明らかに間違っている。作品の中には、白系ロシア人・王秋琴の姑・夫・同僚は何れも王秋琴の名前を使って彼女を呼ぶ。そして、「白眠堂径租」という小説においても、日本人の宿泊者が中国人大家の妻を「太太」と呼ぶ。ここから見れば、「シーフ」(媳婦)という呼び方の背後には特別な意図が隠れていると言える。日本人の妻が王秋琴をわざと「シーフ」と呼んだのは、家庭に従属する者という意味を認めた上で、中国人が支配民族の日本人に従属したことも強調するからであろう。言い換えれば、「シーフ」(媳婦)は日本人の妻にとって、既婚の中国人女中の別称となった。作者はこのような場面の設定を通して、中国人と日本人の間にある階級と地位の差を強調しようとしたと言えよう。

竹内正一は都市空間の分裂と民族関係を描写すると同時に、中国人の生存状態にも目を注いだ。主人公の王秋琴は家父長制に圧迫されながら、遅く生きていこうとする中国人女性である。家父長制からの圧迫は三つある。一つは、父親からの圧迫である。落花生を売る行商人をしている父親は娘を商品として、七十円の金で陳修身に売った。そして、娘が姑に虐待されたことを知っても、我慢することしかできないと言っただけで守ってくれない。次は、夫に虐待されること。陳修身は毎日何もせずにぶらぶらする人で、「雑貨店はすっかり水に流され、根も子も失くして、それ以来すっかり不貞腐れて、もつぱら道外の遊戯場で毎日行はれる秘密の賭博に日を送るやうになつた」。しかも、彼は常に暴力を振るって、「傍へ寄つて来た王氏の肩をぐつと掴んで、唸るやうに言つたかと思ふと、ずるずる妻の胸を引きずつて、自分などの炕の上に激しく投げ出した」²⁴。姑も王秋琴に辛くあたり、生活のために売春さえ強要した。王秋琴は苦難に挫けず、歯を食いしばって我慢していった。妊娠して8ヶ月になるまで、ロシア人の苗木畑で働き、一家の生活を支えていた。苗木畑の仕事をやめた後、馬家溝の日本人高級住宅地へ行って、日本人のために服を洗って、育児のための費用を稼ぐようにした。愛のない世界で、自分を支えるのはもうすぐ生まれる赤ん坊だけである。圧迫されながら、遅く生きていこうとする中国人女性の間像は短編小説「白眠堂径租」(『満洲浪曼』1939年2月号)にも登場した。主人公の王秀芳は「もと道外の平康里の三等妓館の女だつた。落籍されて王のところへ来てから、その持前の勝気な性質で、十何年か吸つていた阿片も止め、眼に一丁字もないが、曲りなりにも数字ぐらいはかくやうになり、そして、山のやうな負債を背負ひながら、この白眠堂径租の経営をやつて行く」²⁵。

竹内正一は家父長制に圧迫された王秋琴に同情を示しながら、彼女の軟弱と愚かさを批判した。王秋琴は家父長制社会の道德規範に従って行動する。姑に買春を強要されたとき、夫の名前を呼びながら抵抗した。しかし、この抵抗は、封建的貞操観念の表れに過ぎない。夫に炕の上に激しく投げ出された時、却ってその暴力を夫のつよい愛撫と感じて歓喜した。ここから見れば、王秋琴は、遅しいながら、弱い一面を持っている中国

²⁴ 注20に同じ, p.19.

²⁵ 注20に同じ, p.38.

人女性である。

作中には生活習慣等による民族間のギャップも指摘された。それによって、民族間の壁を越えて「五族協和」の世界をつくるのは無理なことと暗示された。まず、食習慣の差異である。「宋のかみさんは、他の若い女達と、葱に生味噌をつけたのを菜にして、饅頭をむしやむしや頬ばりながら、人声で何か話して聞かせてゐた」²⁶。次は、衛生観念の差異である。「王氏は黙つて、土間で粥に入れる韭を刻んでゐた。韭の強い臭ひがつんと鼻をついた。思わず鼻をしゅんと言はすと、指についた涙汁を、強く自分の靴になすりつけた」²⁷。さらに、中国人に特有の国民性も描かれた。「松花江の水が氾濫して、道裡から道外にかけての低地帯一帯を濁水で水びたしにした時、多くの満人達は持前の悠長さから、その間際までよもや自分の家迄はと落ち着き込んでいて、嘗て土磚子の壁から、草と泥で固めた屋根までがじわじわと水の力に押し潰され、崩れ出すやうな土壇場になつてから、今更周章でふためいて、命からがら、碌にもつものも持たないで、南崗の高台の方へ逃げ出すものが数知れなかつた」²⁸。

上述したように、竹内正一は、ハルビンの都市空間と社会の対立を取り上げた上で、ハルビンの支配民族の一員としての優越感を持ちながら、植民都市の中国人女性に同情の意を示した。彼が描いた中国人女性は、劣悪な生活環境の中で、男性と同じように戦争と自然災害の被害を受けると同時に、出産と育児などの負担を担って、家父長制に圧迫されて、より多くの辛酸を舐めている。同時に、中国人が植民地の支配民族としての日本人に従属するという問題も指摘し、ヒューマニズムをもって、植民主義者に主導される近代化の輝かしい表象の裏に隠れる社会問題を分析し、「五族協和」の虚妄性を批判した。

4 おわりに

植民都市ハルビンにおいては、政治権力が資本権力を左右した上で、都市空間の構造と民族関係及び階級関係に影響を与えている。竹内正一は鋭い目で、この点に気づいた。彼は上述した作品において、政治権力の変動に伴う資本権力の交代と都市空間の分裂状態を浮き彫りにしたと同時に、綿密な筆致で民族的・階級的差別及び被支配民族の生存状態をスケッチした。白系ロシア人と中国人の描写には限界があるが、内在的・深層的な言説構造を構築し、植民主義国家に対する嫌悪感を表した。

竹内が作品の中にこれらの社会問題を取り上げたのは、フランスとロシアの現実主義文学の手法から影響を受けただけでなく、大連文壇の自由主義・ヒューマニズム文

²⁶ 注20に同じ, p.9.

²⁷ 注20に同じ, p.31.

²⁸ 注20に同じ, p.2.

学の影響と植民都市の体験とも関係がある。

早稲田大学在学中、竹内は大正デモクラシーの影響を受けて、自由主義の思想を受け入れた。1926年「満鉄」大連図書館に入ってから、大連文壇の自由主義・ヒューマニズム文学からも影響を受けた。1920年代後半の大連文壇には、滝口武士・安西冬衛・北川冬彦などの自由主義文学者、古川賢一郎・高橋順四郎・落合郁郎などの左翼文学者が登場し、プロレタリア文学詩誌『燕人街』と『戎克』が発刊された。『燕人街』の同人たちは中国の下積み労働者の生活を描き、植民地の暗黒面を批判した。「燕人」とは、春に山東省から大連に渡り、冬に帰郷した出稼ぎ労働者のことである。工場と港湾で働いたこれらの労働者は、労働条件が悪い割に、給料が低い。このような雰囲気の中で、竹内正一は自然に自由主義・ヒューマニズム文学の手法を受けついで。

ハルビンの生活体験も竹内の文学創作に影響を与えた。彼は1935年から1945年まで、ハルビンに10年間ぐらゐ暮らして、様々な白系ロシア人と中国人に接した。また、仕事の関係で、ハルビンに関する資料にも接したことがある。これらの体験と資料は創作の素材となった。

また、これらの異色の小説を創作したとき、ハルビン文壇はまだ自由な雰囲気が残存していたので、自由に文学創作をする可能性があった。しかしながら、1941年から、「満洲国芸文指導要綱」の公布をきっかけに、「満洲国」による思想統制の強化に従い、自由に創作する空間がなくなり、国策文学の創作が義務づけられて、ヒューマニズム文学創作も終焉した。弘報社の統制の下で、「満洲文芸家協会」が創設され、会員たちが委員長の子田清三郎について「日満一心一徳」を宣揚する国策文学の創作に取り組んだ。その後、竹内正一は現実主義文学の創作活動を停止して、やむを得ず、国策文学の創作に身を投じて、「哈爾濱入城」、「早春」、「鶴岡」などを創作して、開拓団の入植と戦争のための増産活動を描いた。

参考文献

- 広岡光治(1934)『最新哈爾濱案内』、哈爾濱：大北新報社。Hirooka, Mitsuharu(1934) *Saishin Harubin Annai Harubin* : Daihoku Shinpousha.
- 越沢明(1989)『哈爾濱の都市計画』、東京：総和社。Koshizawa, Akira(1989) *Harubin no Toshi Keikaku*. Tokyo : Souwasha.
- 根岸一成(1996)「竹内正一論」『昭和文学史における「満洲」の問題3』早稲田大学教育学部杉野要吉研究室, pp.123-138. Negishi, Kazunari(1996) Takeuchi Masakazu Ron. *Showa Bungakushini okeru Manshuno Mondai* Vol.3. Waseda Daigaku Kyoiku Gakubu Sugino Youkichi Kenkyushitsu. 123-138.
- 西澤泰彦(2006)『図説「満洲」都市物語』。東京：河出書房新社。Nishizawa, Yasuhiko(2006) *Zusetsu Manshu Toshi Monogatari*. Tokyo : Kawadeshoboushinsha.

- 西村真一郎(1939)「竹内正一論——氷花を中心として——」『満洲浪漫』3, pp.124-126. Nishimura, Shinichirou(1939) Takeuchi Masakazu Ron : Hyouka wo Chushin Toshite, *Manshu Rouman* Vol.3, pp.124-126.
- 尾崎秀樹(1971)『旧植民地文学の研究』, 東京: 勁草書房, Ozaki, Hotsuki(1971) *Kyu Shokuminchi Bungaku no kenkyu*, Tokyo : Keisoushobou.
- 岡田英樹(2002)「竹内正一論」『立命館文学』第573号, pp.82-102. Okada, Hideki(2002) Takeuchi Masakazu Ron, *Ritsumeikan Bungaku* Vol.573, 82-102.
- 奥野他見男(2007)『ハルビン夜話・支那町の一夜』(復刻版), 東京: ゆまに書房, Okuno, Tamio(2007) *Harubin Yawa : Shinachou no Ichiya*, Tokyo : Yumanishobou.
- 佐藤四郎(1931)『北満草創(邦人発展史)』, 哈爾濱: 哈爾濱日日新聞社, Satou, Jiro(1931) *Hokuman Sousou(Houjin Hattenshi)*, Harubin : Harubin Nichinichi Shinbunsha.
- 竹内正一(1938)『氷花』, 大連: 作文発行所, Takeuchi, Masakazu(1938) *Hyouka*, Dairen : Sakubunsha Hakkoujo.
- 哈爾濱特別市公署総務処庶務科(1936)『哈爾濱』, Harubin Tokubetsushi Kousho Sourumusho Shomuka(1936) *Harubin*.
- 哈爾濱商工会(1939)『哈爾濱商工名録』, Harubin Shoukougai(1939) *Harubin Shoukou Meiroku*.
- 曲曉範(2001)『近代東北城市的歴史変遷』, 長春: 東北師範大学出版社, Qu, Xiaofan(2001) *Jindai Dongbei Chengshi De Lshibianqian*, Changchun : Dongbei shifan daxue chubanshe.
- 竹内正一(1942)『復活祭』, 大連: 満鉄社員会, Takeuchi, Masakazu(1942) *Fukkatsusai*, Dairen : Mantetsu Shaikai.
- 薛連拳(1998)『哈爾濱人口変遷』, 哈爾濱: 黒龍江人民出版社, Xue, Lianju(1998) *Haerbin Renkou Bianqian*, Haerbin : Heilong jiang renmin chubanshe.

吳佩軍 Peijun WU

(中国) 華南師範大学外文学院日本語科准教授。植民地文化史、日本近代史。編著『伪満洲国文艺大事記(伪満时期文学資料整理与研究 研究卷)』(哈爾濱: 北方文藝出版社, 2017)、『雑誌『北窓』的“北方志向”』(『外国問題研究』総217号, 長春: 東北師範大学, 2015)など。